

狭衣物語における漢文受容の方法

——伝為明筆本と『新撰万葉集』——

一 はじめに

平安後期成立の狭衣物語は、その冒頭に漢文に由来する表現を用い、それまでの作り物語のように「むかし」（うつほ物語・伊勢物語）、「いづれの御時にか」（源氏物語）などのように、過去を想定した話であるとする常套の冒頭とは一線を画している。伝為明筆本による冒頭本文は次の通りである。以下、狭衣物語本文は伝為明筆本を掲げる。

せうねんの春おをしめともと、ま
らぬものなりければやよひも
廿日あまりにもなりぬ

この狭衣物語の作者とされる六条斎院宣旨は天喜三年（一〇五五）閏三月開催とされる六条斎院禊子内親王歌合に同じ表現を用いた和歌を残している¹⁾、

惜しむにも留まらぬものと知りながら心砕くは春の暮れかな

一 文字 昭子

「少年の春を惜しむ」という発想は『白氏文集』一三「春中与盧四周諒華陽觀同居六三三」に「踏花同惜少年春」（花を踏んで同じく惜しむ少年の春）という句があり、この白氏の句は『和漢朗詠集』卷上・春・春夜および『千載佳句』春夜にも納められている。狭衣物語冒頭を飾るこの表現は、よほど六条斎院宣旨の好むところであつたと考えられる。

このように狭衣物語は漢文的表現の摂取に意欲的な面をみせる作品であるが、一方ではまた藤原定家に「歌においては拔群²⁾」と評され、和歌表現において高い評価を受けてきた。狭衣物語は現在、多数の異文が残され、それぞれの本文の典拠として指摘される漢詩や和歌も一様ではない。それら異文の発生の一部は、すでに禊子内親王家周辺で発生したと考えられるが、後の誤写等による異文も当然のことながら混在している。現在私たちが目にする豊富な異文がいつ、どこで発生し、伝えられるにいたつたかを完全に見極めることは、不可能に近い。

しかし、それらの写本のうち、できるだけ古いと考えられているものを検討することによって、少なくとも、当該写本が成立した時代に、その本文がどのように、漢詩と和歌を受容していたかを考察

することは可能である。まずは伝為明筆本の本文を軸として、漢詩と和歌の受容の様相を考察し、この写本が示す漢詩文の受け止め方を明らかにしたいと思う。伝為明筆本は吉田幸一氏が為明(二二九五―一三六四)筆の明証はないとしても、本書四帖の筆跡は、ほぼ為明の時代、すなわち鎌倉末期から南北朝初期の書写本とみることができるとされたものである。また現在宮内庁等に所蔵される狭衣物語の親本と考えられる。物語中、漢詩文の引用は、朗詠、地の文、経文など多数あるが今回は主人公狭衣が朗詠した漢詩の様相を捉えたい。朗詠された詩文は、平安の人々が実際、折りにふれて朗詠したものを物語が反映していると考ええるためである。それが為に漢籍にそれ程通じていない人々―女房たちも耳にすることが多かったであろう。作り物語に漢文をとり込む際、もつとも抵抗がなく、自然に受け入れられた漢文と考える。

二 朗詠された漢文「一しゆにみてり」の状況

伝為明筆本で主人公狭衣が漢詩文を朗詠しているとされるところからの指摘があった箇所は物語中、次の表に掲げる八カ所ある。このうち、一と七は本文異同が激しく、他本では漢詩文ではなかったり、漢詩文の指摘はあるものの、なお問題が残る箇所である。

番号	巻・丁	伝為明筆本本文(校訂本文)	指摘される典拠
一	巻一 二一オ	一しゆに見てりとうちすんし給御聲な をたくいなく (「一種に満てり」とうちすんし給聲、 なお類なく)	新選万葉集

二	巻一 七二ウ	せみくわうえうにないてかんきう秋なりとしのひやかにすんし給御こゑ (「蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり」と忍びやかに誦じ)	和漢朗詠集 (許渾) 千載佳句
三	巻一 一一〇オ	またこれりやうふのあめのでんとくちすさみ給えるなんと (「またこれ涼風の雨の天」と口ずさみ給えるなんと)	白氏文集 和漢朗詠集 千載佳句
四	巻二 三五ウ	たうらいせ、てんほうりんのえんとせむとうちすんし給御こゑ (「当来世々転法輪の縁とせん」とうち誦じ給ふ御声)	白氏文集 和漢朗詠集
五	巻二 一〇一オ	きうろうまさになかしこうかいにあめした、るとうちすんし給へる御けはひ (「宮漏正に長し、空階に雨滴る」とうち誦じ給へる御気配)	和漢朗詠集 (「秋賦」張詠)
六	巻三 九三オ	せいたいのかみとすんし給える御こゑなんと (「青苔の紙」と誦じ給へる御声などと)	菅家文集 和漢朗詠集
七	巻四 二七ウ	はなのいたくちるをみたまひてあとならはふかしとくちすさみ給て (「花のいたく散るを見給ひて「後ならば深し」と口誦さみ給て)	新選万葉集
八	巻四 一一七オ	いと、御とのこもるへくもあらねはえんしろうは心のうちになとひとりこたせ給て (「いと」御殿籠もるべくもあらねば「燕子楼は心の中」など独りこたせ給ひて)	白氏文集 和漢朗詠集

表の一番下に示した典拠とされるものをみると、『和漢朗詠集』が最も多く六箇所、うち三箇所は『白氏文集』所載の詩句である。『新選万葉集』が指摘される一と七は先にも述べたように写本間の異同が激しい。異同の激しさは、あるいは典拠自体が持つ性質―あまり有名なものでないなど―によるためとも考えられる。一は昭和初期、入江相政氏が諸本の異同が激しい部分として指摘され、物語の書写の過程での改変を想定されている箇所である。その本文「一しゆにみてり」に該当する部分の状況を三谷栄一氏は次のように整理されている。⁵⁾

流布本系統

をとほの山には 流布本・榊原本・文談本・藤浪本・久田本

大島本系統

一定佛三寸 三条西本・近衛一本・池田四季本・大島本イ・蓮空本イ

一しよにさんす 神宮文庫本・鈴鹿甲本・刈谷本

一方二三天 大島本・蓮空本

一しゆにみてり 図書寮三冊本・京大五冊本

一すきみてり 静嘉堂文庫本

一すにみては 図書寮四冊本・鈴鹿乙本

深川本系統

めぐりくる 深川本

この場面の物語本文は次のとおりである。以下、異同箇所は太字にし、説明上重要と思われる箇所は傍線をひく。

(イ) 伝為明筆本

かやうにてあまたあれともおなしすちなれはと、めつかくをりにつけたる

ことの葉などにはちらし給へとも心の「二十うちにはいつまでとのみ此世はかりそめ」

にもすさまじうそおほさるへきちやうしにくろむまでそ、きたる御ひとへ

にくれないのす、しの御はかまふみく、みて枕をそはたて、いけのしや

うふの心地よけにしけりたるなかめやり給て一しゆにみてりとうちすんし

給御聲なをたくいなくさてもありつる御ふみの御返事もちてまいれり

物語は五月五日の節句の時期のことを綴り、主人公狭衣は菖蒲の歌を女君たちに贈り、雅な和歌の贈答を繰り広げている。それが、「ことの葉などにはちらし給へとも」ということである。そして、掲出本文の場面に至って自室から庭を眺めつつ、心の中では傍線部のように「この世は仮初めに、ものすさまじうぞ」と、厭世観を抱いていることが書かれる。続く本文は「ちやうしにくろむまでそ、きたる御ひとへ」(丁字に黒むまでそそぎたる御単衣)とあって、これはおそらく狭衣の現世での榮華を表現しているものと考えられるが、贅沢な衣装をまとう狭衣は庭の池に茂る菖蒲を見ながら「一しゆにみてり」と独吟する。この場面が狭衣の外面の榮華と、内面の厭世観が記されることからいって、「一しゆにみてり」という朗

詠は狭衣の厭世観を示すものと考えられる。

さて、土岐武治氏は猪苗代兼寿の『狭衣物語抄』に掲げられた当該箇所の一文「一寸にみてり」を挙げて、流布本の「音羽の山には」という異文と比較し、場面があやめに深く関わっていることから、あやめに関わらない和歌が挙げられている「音羽の山に」は本来的な本文ではないと指摘された。土岐氏はさらに深川本の「めぐりくる」は、「め」は「み」の誤謬転化であって、原形は「みくりくる」であり、『後拾遺集』恋二所載の和歌を引いているとする。つまり「一寸にみてり」という異文はもともとは「みくりくる」であったが、書写者が意不明として、念頭にあった詩句「一寸にみてり」と書き代えたのかも知れないとするのである。

ここで『狭衣物語抄』（伊達文庫蔵本）の本文を確認すると、項目として「一寸にみてり」と掲出し、「菖蒲之古句ニ蕭然一寸碧細葉非無地 千根初絡石 根盤竜骨瘦 花開香細亡 一寸のみとりをみてりとかきあやまれる歟、又此句ヲ一寸ニみてりと吟しかへ給歟」と記されている。⁷⁾『狭衣物語抄』のこの部分は、当初項目として「音羽の山にはなと」を掲出し、その説明に「山しなの音羽の山にたに人のしるべくわかこひめやも」挙げていた。しかしそれを削除して、「一寸にみてり」等の文に書き直している。猪苗代兼寿はこの書き直した部分の古詩の出典について特に記してはいないが、土岐氏によれば「一寸にみてり」は『田機活法』所載の句であることである。⁸⁾『田機活法』は明代の作詩用の辞書であるから、土岐氏が考えられたように書写者が念頭にある詩句に書き換えたことすれば、明代（一三六八年～一六四四年）以降、日本に『田機活法』が入ってからの改変か、もしくは『田機活法』が参考にした更に古

い出典を直接みたということが考えられる。しかし、それは現在不明であり、またそのような一般的でないものを『狭衣物語』に用いるとは考えにくい。この転化について、今一つの見解は、井上真弓氏が出されている。⁹⁾それは「一書にみくり」「一本にみくり」と書き入れたものが本文に取り入れられ、意味が錯綜してしまったかというものである。井上氏はその中で、『新撰万葉集』五六「菖蒲一種満洲中（しやうふいつしゆすのなかにみてり）」なども異本の生成に寄与したか」と述べられている。一体、伝為明筆本による「一しゆにみてり」の部分は、もともとは和歌であるのか、漢詩であるのか。それをどのように考えるべきであろうか。

先の「狭衣物語抄」で猪苗代兼寿はわざわざ「音羽の山にはなと」という項目を訂正し「一寸にみてり」として、その朗詠を漢文由来のものと考えたわけである。また三谷氏の一覧を見ると三条西家本以下のこの一連の異文を持つ伝本は数が多い。本稿で取り上げる伝為明筆本も同様の本文を持っている。これらは最初の「一」が同じであること、「三」と「み」あるいは「天」と「て」はその文字を漢字と捉えるか、変体仮名と捉えるかなどによって、これらの異文が派生したと想定され、もとは一つではないかと考えられる。異文の是非はもとより多数決によつて決するわけではないが、冒頭が漢詩由来の表現ではじまっていること、「一しゆにみてり」様の異文をもつ伝本には伝為明筆本（図書寮三冊本および四冊本）、三条西本、近衛一本、静嘉堂文庫本など伝来の筋のよいと考えられるものが含まれていることなどから、この部分が転化あるいは誤写したものと考える前に、まずは漢詩文の引用の可能性について検討すべきと考える。

三 『新撰万葉集』との関わり

そこでまず井上氏が指摘した『新撰万葉集』巻上夏部二八との関係を考えてい。『新撰万葉集』の該当本文をあげる。¹¹⁾

菹賓俟野邊之側之菖蒲草香緒不飽砥哉鶴歟音為
(五月待つ野辺のほとりの菖蒲草香を飽かずとや鶴が声する)

菖蒲一種満洲中 菖蒲一種 洲中に満つ

五月尤繁魚鼈通 五月尤も繁く 魚鼈通ふ

盛夏芬々漁父鼈 盛夏芬々として 漁父鼈ぶ

栖來鶴翔叫無窮 栖み来り鶴翔りて 叫くこと窮り無し

詩の意は、目前に菖蒲が咲き誇る情景が広がり、菖蒲の茂みからはその香りが漂い、魚や鼈が泳ぎ回っている。その香気の中で、独り漁父が菖蒲を愛でている。そのとき茂みに棲む鶴が空に飛びたつてずっと鳴いているというものである。丹羽博之氏は漁父は漢詩においては野にある人(賢人)の象徴として使われることもあり、仙界に結びつく人であるという。鶴声もまた賢者と結びつき、そこからこの詩は水辺に生い茂る菖蒲から漁父・鶴を詠んで仙界を想起させ、野の遺賢を連想させる詩となっており、情景の背後には水辺の隠逸的世界が詠まれているとされる。¹²⁾この漢詩は俗世からの離脱を述べるといふ点において狭衣の厭世感を承けており、狭衣の朗詠の典拠として内容的には問題がない。また和歌は「香を飽かずとや」とあつて、菖蒲あるいは菖蒲の香が俗世を象徴するとなれば、それ

に飽きるならば、そこを離れようと鶴が誘っているということになり、狭衣の心情に即している。なお現訓読と物語の朗詠が「満つ」「満てり」と相違することに問題はない。また朗詠には「洲中」の語句がないが、冒頭文においても、漢詩句中の一部「踏花」がないことを考えれば、これも問題はない。日常の朗詠も物語中の朗詠も一字一句正確に引用することを前提するわけではなく、『新撰万葉集』を典拠とすることについて、内容的語句的にはならぬ問題がないということになる。朗詠された詩句が『新撰万葉集』のものであれば「一州に満てり」は目前の情景を述べていることになり、『新撰万葉集』の詩句の朗詠されなかった部分「鶴の声」や「漁夫」に狭衣の心情が投影されていると考えられる。

さて、土岐氏や井上氏が深川本の該当部分を和歌「みくりくる」が本来の文であるとされるのは、その前の部分の「御心のうちにはひとすちにももの、み心ほそくて」という深川本の本文との関わりに拠るようである。

(口)深川本

かやうにてけふはあまたあんめれとおなしことにて
と、めつかくをりにつけてはおなしなへてな
らぬところともにはなをさりをち、らし

たまへは御心のうちにはひとすちにももの、み心ほそくて
丁子にくるむまでそ、めきたる御そひとかさね
くれなるのをりす、しのはかまき給てまくら
をそはたてつ、いけのさうふの心ちよけにて
しけりたるをなかめ給てめくりくるなと

くちすさみ給御こゑ猶もたくひなしありつる
御返とも、こゝろくゝなるをあまたみ給なかにも」一六才

傍線部「御心の内には一筋にもののみ心細くて」とあるのは、前後関係から源氏宮を一筋に思っていることを示していると解釈される。従って、深川本の本文で読む限り「めぐりくる」のものと形とされる「みくりくる」が響かせている和歌、「近江にかありといふなるみくりくる人苦しめの筑摩江の沼」(後拾遺和歌集)恋一、藤原道信)が狭衣の源氏宮への心情を表現していることになんら問題はない。

しかし、伝為明筆本の本文を読む限り、この箇所には源氏宮を想う一文はなく、同じ場所には「この世は仮初めに、ものすさまじうぞ」と単なる厭世感が示されるにすぎない。

つまり、この部分はその前の傍線部との関係を考えれば、深川本も伝為明筆本も自らの写本内においては誤写を想定する必要はない。そして二つの本文が少し前の部分と連動しているということは、お互いの異文の文字の形や傍書の本文文化という書写上の転化は除外される。のこる可能性はこの場面全体の作爲的な異文ということになるが、それが「めぐりくる」からの書き換えであるのか、それともその反対に「一しゆにみてり」という本文が漢文由来のものであるためによりわかりやすい和歌へ書き換えたのか、或いはもっと別の理由、当初から二つの本文が流布していたなど、これだけでは判別できない。

以上のことから伝為明筆本の典拠としては『新選万葉集』の可能性は除外すべきではないと考える。しかしながら問題は、典拠

を考えられる『新撰万葉集』は現在、平安当初の実態について解明されているとはいいがたいことである。原撰本とされる写本は下巻に序も詩もないものがあり、古い姿を伝えるものとの見解があるが、まだ結論がでない¹³。原撰本とされるものが平安時代の姿であったとすれば、未完成であったとも考えられ、そのような集が果たしてどこまで広がっていたかは不明である。

そこで内容的に齟齬がないというだけでなく、別の視点から典拠の妥当性を考えてみたい。その一段階として周辺の和歌との関わりを次に検討する。

四 周辺の和歌との関係

物語は、菖蒲の行事の前までに狭衣の卓越した資質、容貌を述べ、一そのあとに源氏宮の比類のない美しさを紹介する。そして狭衣が源氏宮に思いを寄せながらも、宮が東宮妃と見なされている為に鬱屈した思いを抱きながら日々を過ごしていることを記述する。そして問題の菖蒲の場面へ至る。五月になって狭衣は菖蒲の歌を葎の門の女、宣耀殿、一条院の姫宮とかわす。紙面の関係上、和歌のみを次に記す。

一、葎の門の女から狭衣(贈歌)

しらぬまのあやめはそれとわかすとも

よもきかかをとすきすもあらなん(十八ウ)

二、狭衣から葎の門の女(返歌)

見もわかつてすきにけるかなをしなへ

てのきはあやめひましなれば(十九才)

三、狭衣から宣耀殿(贈歌)

恋わふるたもといつもかはかぬに

けふはあやめのねさへなかれて(二十才)

四、狭衣から一条院の姫宮(贈歌)

おもひつゝ、いはかきぬまのあやめ

草みこもりなからくちやはてなん(二十才)

五、宣耀殿から狭衣(返歌)

うきにのみしつむみくつとな

りはて、けふはあやめのねたになかれず(二十一才)

この贈答歌の応酬の四と五の間に、「しゆにみてり」の場面が入っている。そして直前の四の狭衣から一条院の姫宮へ和歌には返歌がない。四は「もの思いをしながら岩で囲まれた沼のあやめ草が水に隠れているように、そのまま朽ち果ててしまいたい」というもので、狭衣が律の門の女と軽快な贈答を交わしているものとも、また宣耀殿へ自らが「あなたを恋慕っています」という詠となつてゐるのは少し趣が異なる。初句の「おもひつゝ、」は前後の文脈から読めば、「あなたのことを思いながら」となるが、下句が「水の中に沈んで朽ちてしまいたい」とあり、自閉的ともいえる詠みぶりである。この歌のあとにそのまま掲(イ)の「かやうにてあまた」云々の本文が続く。この四の和歌はむしろ後に続く文章の「をりにつけたることの葉などにはちらし給へとも心のうちにはいつまでとのみ此世はかりそめにもすさましようそおほさるへき」へ至る前哨という感が否めないのである。狭衣の厭世感に通じる下句といえる。朗詠場面の直前に置かれたこの和歌は狭衣の心情を導き出す役割をも担つてゐることになる。

ここで、念のため他の朗詠箇所が周辺の和歌とどのような関係に

あるのか確認しておく。

表の二の朗詠「せみくわうえうにないてかんきう秋なり(蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり)」の部分、前後の状況も含めて本文を次に示す。

・・・・・大宮れいの

ゆゝしきことにくちなれ給へるこそ心う

けれとていといましとおほしたるを

ゆくすへはかしくしかるましき心のうち

を御らんせさせたらはましていかにと思

つ、けられて涙もこほれぬへしちい」七二才

さき木きちやうにまきれいらせ給ぬ

れはすさましようてはしつかたに人く

ものかたりし給に御まへの木たち

こくらうあつかはしけるなるなかにせみ

のあやにくになきいてたるを見いたし

給て

声たて、なかぬはかりそ物おもふ

身はうつせみにをとりやはする

なんとくちすさみにいゝなしてせみく

わうえうにないてかんきう秋なりとし

のひやかにすんし給御こゑめつらしき

ことならねとわかき人くはしにかえりめて

たしとおもふもことはりなり・・・

『和漢朗詠集』(卷上・夏・蟬一九四)に載る詩の全文は「鳥下緑

蕪秦苑 蟬鳴黄葉漢宮秋（鳥緑蕪に下りて秦苑寂かなり、蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり）¹⁴であり、堀川大臣第で、御前の木立を見ながらのこの朗詠は、まさに漢宮の秦苑に対応している。ここで狭衣は自らの心情を和歌に詠んでから、漢詩を朗詠している。和歌は狭衣の心情を述べており、朗詠は情景を反映し、朗詠されなかつた部分に狭衣の心情が感じとれるものとなっている。つまりこは、周辺14の和歌と朗詠と朗詠の典拠との関係が、先ほどと同じ役割を担っているのである。表の三、五、六も同様であるが、紙面の関係上、説明を省く。

五 異なる例について

異なる例として、表の四・七・八がある。まず四は朗詠は狭衣が嵯峨院女二宮と契り、後朝の和歌を取り次ぎの女房、中納言典侍に託した後、その首尾はどうかと典侍に尋ねた折に口ずさんだものである。

・けさの物まいらせ侍りぬれといさや心え侍ら
ぬ事ともにおもひ給みたれてうしろめ

たき心のほとこそけたいなからんほどの御を「三五ウ

こないのしるしもかひなくやと見え侍るめれとて

恋のみちしらすといひし人やさはあふさか

までもたつねいりけりとあるをひとりあみ

せられ給ものからいとつみえかまじきことのみま

かなとひとりこちて帰てたうらいせ、てんほ

うりんのえんとせむとうちすんし給御こゑ

なをおもしろくめてたくいかなりける事
の有けるにかとわつらはしくてなをなとはいひ
はて給はす・・・・・・・・・・・・・・・・

直前の和歌は中納言典侍から狭衣への問いかけである。その和歌に返歌するかわりに口ずさんだのが、「返りて当来世、転法輪の縁とせん」という朗詠で『和漢朗詠集』（卷下・仏事五八八）に「願は今生世俗文字之業狂言綺語之誤。翻為当来世讚仏乘之因転法輪之縁（願はくは今生世俗の文字の業狂言綺語の誤りを以て。翻して当来世讚仏乗の因転法輪の縁と為さん）」とある。中納言典侍は、狭衣が女二宮に文を送るのを不審に思つて「狭衣様は恋の道なんて知らないとおっしゃっていましたが、それでは宮にお会いなさつたのですね」と問いかけたのに対し、「恋の道という罪を翻して来世やその先の成仏の縁としよう」と思わせぶりに答えたものである。傍線部の典侍の仏道の語を受けての朗詠となっている。もともとこの句は文学という「狂言綺語」を転じて、仏の縁としたいと述べたもので、恋とは直接関わらないが、狭衣は、「文学」を「恋」に置き換え、本来仏道とは相反する恋の道をもつて、仏道の機縁とするのですよと返答しているわけである。表の八の例も、同じく朗詠は和歌を補完する形で狭衣の心情を述べたものである。前掲の和歌との関係は異なるが和歌と朗詠が組となっている点は同じである。残りは表の七であるが、こはまた別の問題がある。

表の七の箇所は鳥内景二氏が『新撰万葉集』を引用の典拠としてあげている。¹⁵氏は大系補注、吉田幸一氏の掲げた諸本の本文を列挙され、草体からの誤読の可能性を指摘された。諸本の異同は次の通

りである。

かうりたまかへりてあととなるはふかし

内閣文庫本・平出

かふり給はりてあととなるはふかし

本・承応板本

かうりたまかへりてあとなきいふかし

東大野平本

かうわたまかへりてあとなかはふかし

近衛一本

かをり給けるをあとなうはつかし

九条家本

からふりたまかへりてあとなからふかし

蓮空本

島内氏は『新撰万葉集』巻下・夏歌二十二首の中の詩句、「漚桃梨花落後興」のうち、「花」の草書体を「玉」と誤ったのではないかと提示された。そして「このような推測がもしも正しいとするならば、諸本の形態はあまりにも原形から離れてしまっている」と述べられた。しかし、問題の詩句は訓読するならば、「のべるに桃梨花落ちて後の興」とでもなろうか。「後興」を「あとならばふかし」「あとなるはふかし」と読むにはかなりの無理があるといわざるをえない。もとより、冒頭部分の朗詠や表の三や八の朗詠は正確な典拠の字句を再現してはいないが、それでもこの例ほど離れてはいない。当該部分の伝為明筆本の本文は次の通りである。

・ ・ ・ そのいたくくむしたる名さし

こそけによそへつへけれとこよなく

みくらへたまはむかねたければとてえみ

たまへるはなのほいよりはこよなくまき

りたまいたりはなのいたくちるをみた（巻四・二七ウ）
まひてあとならばふかしとくちすさみ給て

かうらむにをしか、りたまえるまみのけ

しき御こゑなとかのさくらはよきてとて

はなの下にやすらひたまへりし御さまよ

りもこよなくなつかしいまめかは

しくしまさりたまへりとそみゆる・

典拠が指摘された『新撰万葉集』巻下・夏歌二十二首中の歌と詩も、琴を弾くなど、狭衣物語の場面と重なる部分もあるが、季節は夏、時も夜であり、物語とは異なっている。

沙乱さざなみ丹情に解筒げきゆう暖杵ぬあき身緒みせ木高きたか別手わかて風毛かぜも間南まなみ

西嶺木高引風羽 底前叢爛少月光
伯牙彈玉琴韻調 漚桃梨花落後興

伝為明筆本文では朗詠のあと、夜になって、管絃の催しがあり、「ゆふつくよはなやかにさしいて、木すゑとも、おもしろくみわたされたり」とあるが、狭衣は勧められる琴もひかずに、ただ扇を打ち鳴らして桜人を歌うだけである。文脈からも『新撰万葉集』の典拠を認めることはできない。

六 まとめ

以上、考察の結果をまとめると、一に見られる異文のうち、伝為明筆本文の「一しゆにみてり」は、深川本等の「めぐりくる（み

くりくる)の誤写と考える必要はなく、典拠と思われる『新撰万葉集』との関連も特に問題はない。『新撰万葉集』を典拠と認めた場合、伝為明筆本文の前後の文とも合致する。『新撰万葉集』はいわゆる原撰本の状況から考えて平安・鎌倉期に広く一般に流布していたかどうか、そのような特殊なものを狭衣物語作者が用いたかどうか疑問が残る。

しかしながら他の朗詠箇所における漢詩受容の様相と比較すると、全八例のうち、周辺の和歌との関係が表の一と同じであったのは、二、三、五、六の四例であった。これらは和歌と朗詠部分が狭衣の心情を示し、朗詠されなかった典拠の詩句と物語の情景が同じであるという共通点を持っている。

更に、「しゆにみてり」を文脈の流れから考えた場合、漢詩の朗詠は物語展開の流れを滞らせることなく繋がっている。問題の菖蒲の場面は、まず狭衣の超越した資質について述べ、次に源氏宮のたぐいまれなる美しさと出自について述べる。そして狭衣の源氏宮に対する満たされない思いが綴られ、そして五月四日に律の門の女との贈答歌、五日に狭衣から宣耀殿と一条院へ和歌が贈られる。そして池の菖蒲を眺める場面、宣耀殿からの返歌に涙ぐみ、狭衣が参内する記述へと続くという文脈である。この流れの中、事実上独詠歌となっている狭衣の「朽ちやはてなん」という和歌のあとに、深川本のように源氏宮への思いをのべ、直後に宣耀殿からの返歌を手にして涙ぐむという展開は、源氏宮が他の女君たちの記述に入り込んでおり、源氏宮への思いの直後に宣耀殿からの返歌に狭衣が涙ぐむというのはやや奇異な感が否めない。対して「朽ちやはてなん」という和歌があとの厭世観を導き出し、朗詠によって、狭衣の心情

を示し、遅れてきた宣耀殿の返歌にわずかばかり慰められるという展開はよどみがない。

今一つの異文「音羽の山には」については、『日本古典全書』の補注で「狭衣の口に上った詞は心地よげに茂った池の菖蒲を背景としてその厭世の心を表現したものと考へられる」として、「音羽の山には」という拍数から考へて、今様か何かの歌謡の一句を口ずさんだのであろうとする。この歌謡の一節かといわれる異文もまた「しゆにみてり」と共に厭世感を表した同様の傍線部分の本文を持つている。「音羽の山に」はこれまで指摘された和歌に関しては、菖蒲と関わらないという点において、退けることは妥当である。しかし現在伝わらない今様、歌謡に厭世観を示したものがあつたと考えれば、なぜここに「音羽の山に」という異文が発生したのかは一考の価値がある。先に述べたように異文の是非は多数決では決まるとは限らない。しかし二種類の異文が、対になる前出部分と同じ厭世感を示しているとすれば、少なくとも享受の歴史の中では、厭世観が受け入れられていたとすることができるからである。

それよりも、この一の部分において重要な問題は、他の朗詠部分にはそれほど顕著な異同が見られないのに対して、なぜこのような多くの異文が発生したのかという点であろう。ここで興味深いのは伝為定本の状況に対する吉田幸一氏の指摘である。「為定本は一行空白で、欠文である。この部分は諸本意味不通で、早くから出典未詳箇所であつたらしい」とされる¹⁶⁾。つまり多数の異文、意味不通の書写、欠文が示すことは、この本文が周囲の文章とは異質であつたことを示唆している。そして和歌、今様、漢文の中で最も異質なものは、和文でない漢文であろう。また出典が『新撰万葉集』のよ

うに、あまり流布していたとは思えないものであれば、なおさら異同を助長したのであろう。

伝為明筆本に記された主人公が朗詠する漢文は、まず和歌から厭世感を導きだし、散文によってその厭世感を明示した後、主人公の朗詠は厭世感を著していると類推させた上で、はじめて口ずさまれる。散文や和歌という緩衝材を置き、数段階を経ることによって漸く異質な漢文を取り込むことができたといえるかと思う。しかしそれでもその試みは書写される過程で混乱を招く要因となった。その様相が表の一に表れた異文である。そして伝為明筆本および同様の本文を保持する一群は、物語冒頭に示された漢文受容の意気込みを引き続き保っている本文であるということができよう。

本考察は、平成二十四年(二〇二二)八月二十七日にハルビン工業大学(中華人民共和国黒竜江省ハルビン市)において開催された「日本文学の中の外国文学、外国文学としての日本文学」(科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金・基盤研究(C))課題番号23520232)において、発表した内容をまとめたものである。参加を許可して頂いた日本女子大学の福田安典先生、駒沢大学の近衛典子先生をはじめ課題研究者の方々に深く感謝いたします。

注(1) 本文は萩谷朴『平安朝歌合大成』(一九六〇年初版・一九七九年復刻第一刷・同朋舎出版)一六一(天喜四年閏三月)六条斎院祓子内親王歌合より。

- (2) 『明月記』貞永二年三月二十日条
(3) 吉田幸一『狭衣物語諸本集成第一巻伝為明筆本』(一九九三年・笠間

書院)解説、五〇三頁～五〇四頁に宮内庁図書寮蔵本(現宮内庁書陵部)、松井簡治博士田蔵現静嘉堂文庫本と全く同一であり、しかもその原本であったことが書かれている。

(4) 入江相政『狭衣物語』岩波講座日本文学第六回配本(昭和六年・岩波書店)

(5) 三谷栄一『狭衣物語の研究』(伝本系統論編)『平成二二年・笠間書院』二四頁～二五頁『狭衣物語成立考』(初出『国文学論究』昭和二二年二月)

(6) 土岐武治『狭衣物語卷一「音羽の山には」についての再吟味』(国文学)第六巻第四号・昭和三十六年二月)

(7) 川崎佐知子氏『狭衣物語』享史史論究(平成二二年(二〇一〇)・思文閣出版 四四六頁)によれば、宮城県図書館伊達文庫蔵本は注が猪苗代兼寿自身のものであるとのことである。そこで川崎氏の翻刻による伊達文庫本蔵本『狭衣物語抄』を参照した。

(8) 土岐武治氏は「詩学九」とされているが、早稲田大学古典籍データベース、逍遙文庫0801031の『円機活法』(八尾甚四郎友春版・寛文十二～十三年(1672-1672))では「詩学十八之巻百草門石菖蒲」に掲載されている(画像により確認)。

(9) 井上真弓『狭衣物語の語りと引用』(二〇〇五年・笠間書院)

(10) 「五二」は国歌大観の番号による。

(11) 番号は『新撰万葉集注釈』(新撰万葉集研究会編・代表、新聞一美・二〇〇五年・和泉書院)による。京都大学国語国文学資料叢書十三『新撰万葉集 京都大学蔵』に付されたものである。国歌大観番号は和歌五、詩五六である。

(12) 新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』巻上(一)(二〇〇五年・和泉書院)

(13) 浅見徹監修・乾善彦・谷本玲大編『新撰万葉集』諸本と研究(二〇〇三年・和泉書院)

